

学年・教科：中二国語

単元名：字のない葉書

時	活動	成果・子どもたちの様子	備考
1	<p>(導入)</p> <ul style="list-style-type: none"> 時代背景の理解—デジタル教科書にある“疎開中に出された手紙”の動画視聴 自分の家族についてのエピソードを披露。家族とは何か、またストーリーを身近に感じてもらうための活動。 <p>(前半部分の読解)</p> <ul style="list-style-type: none"> 本文全体を「父から筆者への手紙」の前半部分と、後半の「父が妹に持たせたはがき」としてとらえさせる。 音読をしている生徒以外は、父親の“日常の様子”がわかる言葉と“手紙の中の父親像”がわかる部分にハイライトをするよう指示。 上記の活動から出てきた言葉から、父親の人柄を読み取る(ワークシート②) <ul style="list-style-type: none"> 手紙の中の父(折り目正しい・三日に上げずなど) 日常の父の様子(暴君・罵声など) 	<p>(導入について)</p> <ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書にある「疎開中に出された手紙」の資料動画を視聴した際、初めは少しざわざわしていたのだが、親子の書簡の朗読が進むにつれ、水を打ったように静まり返っていった。動画が終わって数秒の沈黙のあと、ある生徒が「先生、切ないねえ。。。」と声を上げたので、戦時中の話に触れないわけにはいかずと思い、国語のワークなどに掲載されている写真なども見ながら、疎開や戦時中の子供たちの状況について話をした。(そのため1時間目の授業計画が押してしまう。) 家族関係についていろいろと発表してもらおうと思ったが、あまり活発な発言が得られなかった。先の映像のインパクトが強すぎたようで、平和な生活の中での自分たち家族の話をするのに遠慮があったという感じ。家族のエピソードは最初に持ってきてよかったかと思った。 <p>(前半部分の読解)</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒全員が前後半の2つのパートに分けることができた。生徒側の気づきとして、前半は筆者が父親について言葉で詳しく述べていてよく分かったが、後半はそれがほとんどないので、直接的にはわかりにくい、心情を想像する必要があるという意見があり、思いのほか表現や描写の違いなどにも着目していることが分かった。 読解の手助けとして、教科書にハイライトを引くように指導を始めて3か月。最初は、自分がハイライトした部分が、他の生徒の意見や板書と違っていると嫌だという生徒がいたり、“教科書を汚すのが嫌”という生徒もいたが、やっと躊躇なくできるようになってきた。 授業計画が遅れてしまっていたので、少し焦りながら授業を進めたため、それが生徒に伝わってしまった。いつもなら、生徒の発言に質問を重ねていると考えを引き出すのだが、中途半端な発言で終わらせてしまう場面が多く大反省。 日常の父の様子が変わる言葉に関しては、比較的どの生徒もハイライトができていた。漫画のような人柄と暴君という言葉に、「昭和だなー」との声が。今はありえない父親像という声が多数。 反対に手紙の中の描写から読み取れる父親像については、少し苦戦していたようだ。描写から想像できる人物像を表現する言葉がなかなか思いつかなかったようだ。 90%ほどの生徒が、語句を調べる宿題をやってきていたため、授業への集中度が高かった。授業後にどれくらい意味が分からない言葉があったのかを尋ねたところ、日常会話でも両親から発せられるのを聞いたことがほとんどない言葉もあったとのこと。単元によっては事前学習が必要と痛感。 	<ul style="list-style-type: none"> 映像の力を改めて感じた。光村図書サイトの、教科書に添じたいろいろ資料は掲載されているが、今後デジタル教科書にあるような動画資料もいくつかフリーで手に入れることができたらいいのにと考えた。 <p>(教科書への書き込みについて)</p> <ul style="list-style-type: none"> 現地校では教科書を学校から借りるというスタイルなので、書き込みが禁止されていたという理由もある。また、今はデジタル化が進み、書き込むという活動がなくなった。 定期テストなど問題を解く場合は、解答のヒントになる重要な部分に線を引いたり、囲むなどするように指導している。26人中6人ほどが実行している。

2	<p>(後半部分の読解)</p> <ul style="list-style-type: none"> 末娘の学童疎開を決めたときの両親の淡々とした言動の中に潜む末の娘への深い愛情、そして疎開先で日々変化していく妹の様子を、葉書に書かれた○の大きさや×から読み取る。(ワークシート③) 妹が家に帰ってきたときの一連の描写から、クライマックスにあたる部分を見つけ出す。隣の席、または小グループを作り、お互いの考えを共有する。 あえてクライマックスの一文を選ぶとしたらどの文章になるか、またどうしてそのような考え方に至ったのか、理由づけも併せて話し合いをし、発表する。 	<p>(後半部分の読解)</p> <ul style="list-style-type: none"> 約7分ほど、1時間目の授業のまとめの時間に取られる。 “クライマックスの一文を選ぶ”ためのグループの話し合いに時間を割くため、思い切って末妹を学童疎開に送り出す際の両親の行動から読み取れる思いの部分の読解に時間をかけなかった(後にクライマックスがどこかわからない生徒が出てきてしまった。話し合いの活動を重視したことが裏目に)。 疎開先の妹からの葉書が○から×に変化していく描写のあたりから、生徒が物語にのめりこんでいく様子が分かった。私の質問に対するかぶせ気味の答え方をすることも。 今回のチャレンジの一つ、「クライマックスの一文を探そう」は結局、失敗に終わった。教師の音読を聞きながら、「ここがクライマックスの一文」と思うところをハイライトしてもらい、それをもとに話し合いをと考えていたが、いざグループに分かれての話し合いを机間指導しながら見ていくと、“妹の葉書が初めて届いたとき”や“妹が家に帰ってくる日”の中から一文を選んでいる生徒が四分の一ほど存在することが分かった。クライマックスは父親がはだして表に飛び出し、末娘の肩を抱いて男泣きする部分であることは理解しているだろうという予想が外れてしまったため、ここを押さえたいかないとリライトの活動に影響が出ると思い、クラス全員で“クライマックスを見つける”という授業案に変更した。 ✓ 現地校ではクライマックスをどのように見つけるのかを生徒たちに説明させる(下記の図参照)。生徒は、「セットアップ、コンフリクト、ライジングアクション、クライマックス、フォーリングアクション、レゾリューションって教えてもらった」とすらすら答えるので、言語が違ってもアイデアは同じであると再度確認。 ✓ 黒板に父親の心情曲線を描くことにした。横軸を主な出来事、縦軸を父の心の振れ幅の大きさとし、曲線がどのように変化していくか、生徒の意見を聞きながら表を完成させた。はだして飛び出し、末娘を抱きしめ大泣きするところが頂点となり、クライマックスであることを確認。 当初予定していた授業案はできなかったが、現地校での物語の読み方の学習について聞き、それを当てはめながらの授業をしたことによって、英語の方が得意な生徒らが生き生きと話し合いに参加していたことがよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業後、中学の国語科の先生に話をしたところ、もしクライマックスの一文を探すという案で授業を進めるならば、選択式でいくつか一文を用意し、それを選ばせるという手もあるとアドバイスを受けた。今回は授業案を変える必要があったので、できなかったが、短い授業時間を有効に使うにはいい方法だと思った。
3	<p>(リライトを理解する)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回取り組むリライトの2つのポイントを説明(ワークシート④)。その後、作品の一部を教師が書き換えたリライト文と原文を生徒自身が比較検討。「父親の視点から書かれているため、言葉が置き換えられている部分」に黄色のハイライトを、「書かれていない父親の心情を想像し、書き加えられているところ」に緑のハイライトを引 	<p>(リライトを理解する)</p> <ul style="list-style-type: none"> 昼休みを挟んで同日の3時間目の授業。昼休みを挟むことで気持ちの切り替えができ、リフレッシュした顔を見ながらの授業スタートとなった。 教師のリライト作品と原文を読み比べながら、言葉が置き換えられている部分や心情が書き加えられている部分にハイライトをする活動については、すべての日本語レベルの生徒が問題なく取り組んでいたし、理解もしていたのが見て取れた。 	

	<p>く。 (リライトに挑戦)</p> <ul style="list-style-type: none"> 妹が学童疎開をする準備をする両親の様子が書かれた場面を生徒自身がリライト(ワークシート⑤)。 書き出しを設けることで、書き始めの抵抗感をなくす。 まずは父の視点から出来事が書かれていれば第一段階はOK 心情を想像して書き加えられるよう“ヒントカード”を提示。思考の手立てとする。(ヒントカードはあらかじめ紙に書いておき、黒板に貼りだしていく。) 隣の席や前後の席のクラスメイトのリライトを読み合い、意見交換。 最後に教師がPCを使って、生徒から意見を出してもらいつつ、モデルになるようなリライト文を打ち出す。文章が出来上がっていく様子をプロジェクターで映し出し、クラスで共有。 	<p>(リライトに挑戦)</p> <ul style="list-style-type: none"> クライマックスを見つけられなかった生徒がいたということもあって、教師側が詳しく説明を加えながら生徒と共にリライトを完成させていこうかなと考えてもいたが、「できるかな?大丈夫?」と聞いたときに半分くらいの生徒が頷いていたので、最初から自分たちで取り組ませることにした。 大半の生徒がすぐに取りかかった。書き出しを設けることは有効だと思った。 まずは父の視点から出来事を書ければOKと考えていたが、机間指導していた際に見た限りでは、80%以上の生徒がそのラインをクリアしていた。半分近くの生徒は戸惑うかと考えていたので、意外な展開で少し驚かされた。 机間指導の中で、父の視点からリライトできている生徒には心情を書き加えるようにヒントを出していたが、ここのハードルが高かったようで、半分近くの生徒が書きあぐねていた。一気に書き上げる生徒もいて、二極化した。 教師が生徒の意見を聞きながら一つのモデル文を作り出すよりも、生徒の作品をどんどん見せた方がいいと考え、実物投影機を使って作品を映し出して読み上げていくことにした。それぞれの作品の表現や工夫に、素直に賞賛の声を上げることができているのがこのクラスのいい所。「なるほど、そこかー」という自分にはない視点に対しての反応もあり、同世代の作品には刺激されるのがわかる。 授業後、5人くらいの生徒と、リライトの文中で父親が自分のことをどう表現するのが適当なのか意見交換をした。“俺”というのか“わたし”というのか、またそれはどういう理由なのかなど、楽しそうに話をする様子に創作の喜びを感じてもらえてよかったと一安心。 	
4	<ul style="list-style-type: none"> 宿題のリライト文をグループで発表しあう。 それぞれのリライト文で工夫されている部分や自分にはない発想の部分を見つけ評価し合う。なぜそのような父の心情を想像できたのか、理由も共有しながらグループで交流する。 グループでの話し合いをクラスで発表。 	<p>(リライト作品の発表)</p> <ul style="list-style-type: none"> 宿題をやってきたのは約7割弱。改めて時間を取って、お互いに作品を批評することは普段はないので、生徒も楽しそうに読み合っていた。 授業中の取り組みが難しい生徒も、宿題にすることで家庭でゆっくと時間がかけられたため、いい作品を作ってきた生徒もいた。保護者と共に取り組んだことも見て取れたが、このような取り組みを繰り返すことで力が付いてくる。家庭での協力はありがたい限り。 普段の授業で自分からは決して挙手して発表しない生徒が数人、グループ活動を通してクラスメイトに評価されたことがきっかけで、自信をもって発表できたのが印象的だった。 	<ul style="list-style-type: none"> いつもは生徒作品をPDFにしてGoogleクラスルームに投稿し全員が見られるようにしたり、一部の作品を授業中に紹介し、その日一日貼りだしておくなどしている。

伸ばせた力、子どもの変化、保護者の反応など

- 生徒たちの主体性を伸ばしたいと、今年はアクティブラーニングに力を入れようと決め、5月終わりごろからその機会を増やしていった。最初のころは生徒側の戸惑いが多く、どうやって話し合いを発展させていったらいいのかわからず不完全燃焼という感じの生徒が大半だった（40分授業の中ではグループ活動に充てる時間がなかなか取れないのが実情）。しかし回を重ねていくうちに、グループ活動の方が自分が発言できる機会も増え、教師を介さずダイレクトに意見交換できる楽しみがわかってきたためか、「今日はグループ活動あるよ」というと「やったー」と声上がるようになった。まだ30%ほどの生徒がグループ活動でも聞き役に回っている現状だが、内容によっては参加することも見受けられることも。
- 生徒たちが自分の意見を発表するとき、促さないでも「その理由として・・・」と続けるようになった。
- 自分の意見を発表するばかりでなく、グループ内で発言していない人の意見を求めることができるようになった。またどんな意見も否定しない、素直に相手を褒めるという行為が以前にもまして増えてきた。

所感

- 自分の意見を話したい、聞いて欲しいという生徒がたくさんいることに改めて気づかされた。お互いの学び合いは非常に効果的。
- アクティブラーニングは教師も生徒も効果的にできるようになるまで練習が必要。早期に結果を求めるべきではないと感じた。

